The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カルト信者の救出 : 統一教会脱会者の「安住しえない境地」
Author(s)	渡邊, 太
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 225-241
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カルト信者の救出

――統一教会脱会者の「安住しえない境地」――

渡邊　太

〈要旨〉

一九七〇年代から発展したカルト宗教は、外部社会とのあいだに高い緊張を生じた。とりわけ、信者の家族がカルトと激しく対立する。何人かの心理学者や精神科医は、洗脳やマインド・コントロールによって若者を騙して入信させているとしてカルトを批判する。子どもをカルトに奪われた家族は、騙されている子どもを助け出してやらなければならないと考える。カルト信者の救出には、ディプログラミングや救出カウンセリングといった方法がもちいられる。

元信者たちは、脱会後に様ざまな心理的苦悩やコミュニケーションの困難に直面する。脱会者の苦悩は、自己の存在の根本的な安定性が失われることによる。本稿は、統一教会信者の救出活動を事例として、このポスト・カルト問題と救出カウンセリングのコミュニケーション・パターンとの関連をあきらかにする。

救出カウンセリングでは、R・D・レインが指摘するような、人を「安住しえない境地」に置くコミュニケーション・パターンが繰り返される。その結果、脱会者は自己のアイデンティティについての確かな感覚を得ることができなくなるのである。

カルト信者を救出する方法は、初期の強制的なやり方から、家族の愛による救出を強調する、より穏やかな方法へと移行してきた。だが、家族の密接な結びつきは、人を「安住しえない境地」に置くコミュニケーションを生み出しやすい。そのことが、ポスト・カルト問題の解決を困難にしている。

キーワード

救出カウンセリング
ポスト・カルト問題
統一教会
安住しえない境地
R・D・レイン

1　はじめに

子どもをカルト教団に奪われた親や家族が、救出カウンセラーと呼ばれる脱洗脳・脱マインド・コントロールの専門家の協力を得て子どもをカルトから脱会させる救出活動は、日本では一九七〇年代からおこなわれてきた。近年、カルト宗教現象が社会的関心を集めているが、カルト信者の救出活動もますます活発になっている。

カルトとは、主として欧米諸国で一九七〇年代に出現した新宗教を指す。宗教社会学的には、外部の環境と相対的に高い緊張状態にある、既存の宗教伝統の枠内にとどまっていない新しい宗教組織と定義される[Stark and Bainbridge, 1985: 25-26]。これに危険、異端、洗脳、マインド・コントロールといった否定的イメージを加えたものが、一般に思い浮かべられるカルト像といえる。[1] 日本でも、一連のオウム真理教事件をきっかけとして、カルトという言葉が広く一般の人びとに知られるようになった。代表的なカルトとされているのは、オウム真理教、世界基督教統一神霊協会（統一教会）、ものみの塔聖書冊子協会（エホバの証人）などである。

子どものカルト入信は、家族にとって危機と感じられる。そこで、カルト信者の親たちは、救出カウンセラーに依頼して子どもを救出しようとする。救出カウンセラーによれば、救出は単に子どもを脱会させるだけではなく、「家族の絆の回復」[田口、1992: 110]にもなるという。

子どもが脱会すればそれでもう家族は安心するが、脱会者本人は脱会後に様ざまな問題に直面する。カルト元信者の多くは、罪の意識や喪失感といった心理的苦悩、対人関係の困難、家族との葛藤に悩まされる。これらポスト・カルト問題は、マインド・コントロールの後遺症と説明されることもある[Langone,1993]。しかし、多くの研究者がマインド・コントロール理論の妥当性に疑問を提出している。マインド・コントロール理論家の主張の根底には、真面目な若者がいかがわしいカルトに入るのは、騙されてマインド・コントロールされているからに違いないという先入見に基づく価値判断がある。マインド・コントロールが、「他者が個人の『意思決定過程(decision-making process)』に微妙に影響をおよぼすこと」[西田、1995: 57]と定義されるのであれば、我われが日常的におこなう相互行為と変わらない。カルトの信仰だけをマインド・コントロールとして批判する明確な基準は示されていないのである。このようなマインド・コントロール概念によって、すべてを説明しようとするのは無理がある。[2]

日本では、統一教会信者に対する救出活動がもっとも大規模におこなわれている。統一教会は、一九五四年に韓国で文鮮明によって創設されたキリスト教系の新宗教である。[3] 日本での布教は一九五八年に始まる。一九六〇年代には、「親泣かせ原理運動」（朝日新聞、夕刊、一九六七年七月七日）として大学キャンパスでの勧誘が社会問題となった。さらに、日本共産党との対立や多くの被害者を生んだ霊感商法、有名人が参加した国際合同結婚式（祝福）とその後の

脱会騒動などで話題になっている。統一教会に対する反対運動は早くから組織されていて、「原理運動被害者父母の会」「原理運動を憂慮する会」といった世俗的組織の活動と主流派のキリスト教による宗教的な反対運動とがある。

主流派のキリスト教は、統一教会の教えである「原理」の聖書解釈を異端的として批判する。神学的には複雑な議論になるが、その要点だけを簡単にまとめると、イエスの十字架上の死と復活による救いを認めないことと、文鮮明を再臨のメシヤとすることの二点において、統一教会はキリスト教の範疇を逸脱するということである。イエスの救いを認めないにもかかわらずキリスト教を名乗る統一教会に対して、主流派のキリスト教は強い反感をもつ。[4] いくつかのキリスト教会は、統一教会信者の救出活動に積極的に関与している。聖書についての誤った知識を伝える統一教会から信者を救い出すことは、キリスト教のつとめと考えられるのである。

本稿は、統一教会信者救出活動の事例調査の検討をとおして、カルト脱会後の苦悩が救出方法の洗練の結果として生じたことをあきらかにする。その際、救出カウンセリングにおけるコミュニケーション・パターンとポスト・カルト問題の関連が議論の焦点になる。

2　カルト信者救出活動の歴史

英語のcultはラテン語のcultusに由来する。原義は儀礼や崇拝であるが、アメリカでは一般的に、伝統的なキリスト教とは違う異端の新興宗教という否定的な意味でカルトという言葉が使われる。こうした否定的なカルト評価には、反カルト運動によるカルト批判キャンペーンが大きく影響している。

反カルト運動は、子どもをカルトに奪われた親たちの草の根運動として始まった。子どもがチルドレン・オブ・ゴッドに入信した親たちによって一九七二年に結成されたFREECOG（Free Our Sons and Daughters from the Children of God Organization）が最初の反カルト団体である。FREECOGは一九七四年にCFF（Citizens Freedom Foundation）に発展し、一九七〇年代半ばまでに同じようなグループがつぎつぎと結成され、全国的なネットワークを形成した。一九八〇年代に設立されたAFF（American Family Foundation）やCAN（Cult Awareness Network=CFFから改称）は、全国的な反カルト運動組織である。[5]

反カルト運動の主要な目的は、子どもたちをカルトから救い出すことである。親や家族は、子どもが自分からカルトに入ったのではなく、洗脳やマインド・コントロールによって騙されて入信させられたのだと考える。カルトに批判的な立場の心理学者や精神科医が提唱する洗脳理論やマインド・コントロール理論は、この見方を裏づける。若者のカルト入信は、本人の意志によるのではなく、教団の心理操作の結果と見なされる。

一九七〇年代には、ディプログラミングと呼ばれる救出方法が盛んにおこなわれた。ディプログラミングとは、カルトによって信者に植えつけられた思考プログラムを解除するという意味である。職

業的ディプログラマーたちは、多額の報酬と引替えにカルト信者を脱会させた。

ディプログラミングの創始者テッド・パトリックの方法は、子どもを強引にカルトから引き離すものである。家に帰ってきたとき、あるいは白昼の路上で、カルト信者はディプログラマーに捕らえられ力ずくで車に押し込められて、あらかじめ用意されたモーテルや地下室に閉じ込められる。ドアには鍵がかけられ、窓は釘付けされている。そこでディプログラマーや元信者たちから罵倒され嘲笑されて、カルトを脱会するように脅される。信者が眠りかけるとベッドを蹴ったり体を揺さぶって起こす。脅迫のような説得が延々とつづけられる。

こうした方法は高いリスクをともなう。ディプログラミングから脱出したカルト信者たちは、教団の支援を受けてディプログラマーを訴えた。裁判では、多くの有名ディプログラマーに有罪判決が下されている。[6] ローマ・カトリックやバプテスト、政治運動、同性愛者などの様ざまなグループをターゲットにしたことも、ディプログラミングがいかがわしいものであるという印象を与えた。信教の自由を脅かすディプログラミングの評判はしだいに悪くなり、やがて反カルト運動組織内部でも暴力的なやり方に対する反省の声があがる。CFFは、一九八一年に、ディプログラミングをやめて救出カウンセリングを支持するという公式声明を発表した。反カルト運動は、職業的ディプログラマーとの関係を断つ一方で、精神科医や心理学者ら専門家の関与を深めていくことで、運動のイデオロギーの精緻化に向かった。一種のしろうと療法ともいえるディプログラミングに代わって、心理学の専門知識に基づく救出カウンセリングが、推奨される救出方法となった。ディプログラミングから救出カウンセリングへの移行について、A・シュウプとD・ブロムリーは、つぎのように説明している。「強制的ディプログラミングにともなう増大しつつある法的リスクと強制的でないテクニックの発見が、ディプログラミングを自発的な『救出カウンセリング』と名づけられた今日の実践へと移行させた」[Shupe and Bromley,1994: 8]。

救出カウンセリングには、臨床心理学の知見が応用されている。カルト信者の状態を表現するために使われる言葉は、かつての「ゾンビ」や「洗脳されたロボット」から、「心的外傷後ストレス症候群」や「解離状態」といった専門用語に変わった[*ibid*: 12]。また、何人かの救出カウンセラーは、カルトの勧誘方法について、一九五〇年代に中国共産党の強制収容所でおこなわれていた洗脳よりも高度な技術であるマインド・コントロールが使われていると主張した。洗脳よりも巧妙なマインド・コントロールを解くためには、心理学的知識に基づく救出カウンセリングが必要というわけである。

日本でもアメリカとほぼ同時期から救出活動がおこなわれている。日本で独自に始められたもので、はじめの頃は精神病院に強制入院させる方法がもちいられていたが、アメリカと同様に、しだいに穏健な方法へと移っていった。とくに、アメリカで活躍する救出カウンセラーのスティーヴン・ハッサンの著書『マインド・コントロールの恐怖』の翻訳（一九九三年、恒友出版）が出版された頃から、

カルト概念やマインド・コントロール理論、救出カウンセリングの技法が輸入され始める。

アメリカと日本の救出活動の大きな違いは、アメリカでは専門的訓練を受けた臨床心理カウンセラーが関与するのに対して、日本では主としてキリスト教の牧師が救出カウンセリングをおこなう点にある。[7] 日本基督教団は、一九八七年に「統一原理問題連絡会」を設置し、各地の教区事務所や教会を窓口として、統一教会問題に関する相談を受け付けている。他のキリスト教会でも、教会単位で救出活動に積極的にかかわっているところがある。

救出カウンセリングをおこなう牧師によれば、マインド・コントロールを解くためには、子どもを統一教会から物理的に隔離して「保護」する必要があるという。「保護」は、けっして監禁ではなくて、信者に自分の頭で考えられる環境を作ってあげるためのひとつの手段と考えられている。以前は自宅でおこなわれていたが、自宅だと仲間の統一教会員がやってきて、家を取り囲んで声援を送って説得を妨害するので、自宅での「保護」はおこなわれなくなった。ホテルやアパートも利用されたが、現在ではマンションの一室を借りて「保護」するのが一般的になっている。「保護」の場で説得を繰り返し、信仰が間違いだったと納得させたうえで脱会させる。

「保護」による救出は、アメリカの救出カウンセリングの技法と一致する。『マインド・コントロールの恐怖』の訳者浅見定雄は、この本の翻訳を請け負った理由として、「私が過去二〇年以上の試行錯誤で次第にたどりついた『説得』の方法が、この著者のいう『強制的でない救出カウンセリング』とあまりに似ていたからである」[Hassan,1988=1993: 360]とあとがきに書いている。

救出カウンセリングでは、家族の愛情による救出が強調される。精神病院に強制入院させるような方法には愛情が感じられない。「保護」は、親の責任と愛情の証しである。強制入院から「保護」へという救出方法の変化は、このような救出活動のイデオロギー変化と並行している。単に子どもをカルトから奪回するのではなく、子ども本人を最大限尊重して親の愛情によって救出することが求められる。日本でもアメリカでも、カルト信者の救出は、強制的・暴力的なやり方から、家族の愛とカルト信者本人の意志を尊重する方法へと洗練されてきたのである。

3　統一教会信者救出活動の事例

統一教会信者の救出活動は、主流派のキリスト教を中心に全国的におこなわれている。各教会間で協力しあうこともあり、極端に過激な方法をとる一部の牧師を除けば、家族の愛を重視する救出方法が定着している。[8]

一般に、統一教会はあまり評判がよくない。だから、子どもが統一教会に入信した家族は、子どもが騙されて悪いことをやらされているのではないかと心配する。けれども、そうして牧師のところに相談に来る家族の多くは、実際には統一教会についてほとんど何も知らない。そこで、牧師はまず統一教会の教えやマインド・コント

ロールの実態について勉強するよう指導する。[9] 牧師によれば、子どもを救出するためには、マインド・コントロールされているときの心理状態を家族全員が正確に把握しなければならないという。親や家族が真剣に取り組んで勉強することで、救出が可能になる。

家族は、子どもが悪い子だから統一教会に入ったのではないということを十分に理解しなければならない。N牧師は、「統一教会に入る子はみなよい子だった」という。ふつうのよい子がある日突然、霊感商法のような犯罪活動に荷担するようになるのは、マインド・コントロールされているせいだと考えられる。救出カウンセリングのガイドブックにも、「そのカルトに入るまでは、普通の若者だった、その若者たちが、悪いことを良いことだと信じて実行するようになる。こういう劇的変化を起こすためには、どうしてもマインド・コントロールが必要なのです」[浅見、1997:214]と記されている。

子どもたちを助けるためには、具体的な技術や知識も大事だが、それよりも救出に取り組む家族の心構えの方が重要であることを牧師は強調する。K牧師は「家族には心についてよく考えてもらう。心がどのように動かされるかを知らなければ統一教会と対決できない」という。具体的な救出の仕方はすぐには教えない。「最初に教えると、すぐにやっちゃうから駄目」という。知識に頼るのではなく、愛情によって救出することが大事である。

子どもを救出するためには、子どもが統一教会に入った理由を知る必要がある。救出活動では、家族関係に問題があったから子どもが統一教会に入るといわれている。N牧師は、「悩み事があっても家族に相談できないし、たとえ相談したとしても家族はそれに対して真剣に答えてやることをしない。こんな家族関係では統一教会の情的なつながりに惹かれるのは無理もない」という。K牧師も、「統一教会に入る子どもの親は何でも話せる親ではない。心を知ることが大事。自分の子育てについて反省させる。反省できない家族は一生かかっても成功しない」と述べて、家族関係の見直しを要求する。親が反省して愛情をもって子どもを受け入れられるようにならないかぎり、救出は成功しないのである。

統一教会に入った子どもが悪いのではないこと、家族にも問題があったということ、子どもを家族の愛情で受けとめてやること、子どもはマインド・コントロールされた状態にあること、統一教会の教えや反社会的活動の問題点、これらを十分に理解するまで勉強がつづけられる。

家族全員が勉強を積んだうえで、適切な時期を見計らって「保護」を決行する。事前に自宅以外のマンションに部屋を用意しておいて、親戚に協力を要請する。家族と親戚の手で子どもを捕らえ、本人が嫌がったとしても、とにかくマンションに入らせる。「保護」したマンションでは、子ども本人に行動の自由は認められない。外出することも統一教会に連絡することもできない。本人にはマンションの場所も知らされない。

「保護」された本人は、恐怖や怒りを感じて激しく動揺する。元信者のTさんは、「殺されると思った。殺されるというのは、霊的な命を奪われること。信仰を捨てるということは、霊的な命を失うこ

と。すごい恐怖心です。人生最大の恐怖心」と述べている。またMさんは、「つかまったときは、サタン側に勝たなければならないと思い、怒鳴ったり暴れたりして必死に相手をねじふせようとしていた」という。激しい感情的反応は、「保護」してから数日間はつづく。

家族は本人が落ち着くのを辛抱強く待つ。「保護」してからは、子どもに対して愛情をもって接するように指導されている。統一教会信者のOさんは「保護」での生活について、「その間、親から愛されます。食事も豪華で、いつまでも寝ていられるし。統一教会のこともどうでもよくなって戻らなくてもいいと思うようになる」と話している。[10] 子どもの自由は認めないが、それ以外の点では家族はきわめて親切にふるまう。

何日か過ごして本人が落ち着いてきたら、救出カウンセラーや元信者たちが訪れて説得を始める。救出カウンセラーがもちいる説得材料は、統一教会の非合法的な資金収集活動（霊感商法、インチキ募金）、教祖のスキャンダル、マインド・コントロールの実態、統一教会で真理そのものとされている「原理」の内在的矛盾、教理解説書の『原理講論』における聖書解釈の間違いなどである。これらについて、様ざまな資料を提示してていねいに説明する。しかし信者にとっては、そうした説得は単なる誹謗中傷に聞こえるし、理不尽に責められているようにしか感じられない場合も多い。元信者のDさんは、「バカだとけなされた。こんな簡単なことがなぜわからないのかと責められた」という。信者は、救出カウンセラーが指摘する統一教会の問題点をそのとおりには受けとらないから、なかなか説得に応じない。説得の難しさについて、脱会してからずっと救出活動を手伝っている元信者のMさんは、「本人が本当に会話しようとするまでには、力と時間がかかる。これは非常にしんどい作業です。三日で終わるときもあれば、二年かかる人もいる」という。

説得がうまくいった場合、本人は「原理」の間違いを認めて脱会を決意する。ただし、本人が脱会すると宣言しても、すぐにマンションから出してもらえるわけではない。自分ではもうやめたつもりでも、周りから見れば、まだ「原理」の思考が残っていると見なされることがある。元信者Tさんは、「自分でやめたって思ったのは二週間くらい。でも周りからは『原理』的に考えているといわれた」という。マンションを出るためには、救出カウンセラーや説得を手伝う元信者たちから、「原理」のマインド・コントロールが完全に解けたと認めてもらう必要がある。ここでジレンマに陥ることもある。元信者のEさんは、「原理」の間違いに気づいて、統一教会ではもうやっていけないと思ったときに、「どうして自分が信じてしまったのかを知りたいなと思って」、『原理講論』と聖書とを一字一句照らし合わせて「原理」の間違いを自分自身で確かめなければならないと感じた。しかし、もういちど『原理講論』を読みたいというと、まだ未練があるのではないかと疑われる。「自分もはやくマンション出たいじゃないですか。だからいわない方が自分にとってプラスなのかなって考えた」とEさんはふりかえる。

マンションから出してもらえないもうひとつの理由として、偽装脱会の疑いがあげられる。統一教会側では、「保護」を警戒して、信

者に救出活動対策教育を施している。対策教育として、救出カウンセラーの話を聞かないこと、隙を見て逃げ出すこと、脱出が無理なときには脱会するふり（偽装脱会）をして家族を油断させてマンションから出してもらい、その後に逃げることがすすめられる。一度失敗すると警戒が強くなるので、二度目の「保護」はとても難しくなる。救出する側は偽装脱会を避けたいから、どうしても慎重になる。

マンションを出ると、リハビリテーションが始まる。リハビリテーションとして、マインド・コントロールの勉強、聖書の正しい知識を学ぶこと、他の信者の救出活動を手伝うことなどがすすめられる。他の信者の説得を手伝うことは、かつての自分の状態を理解するのに役立つ。Eさんは、他の信者の説得現場を訪れて、説得する側にまわって信者と接したときに、「考え方が同じところをぐるぐると回りはじめてそこから抜け出せなくなる。ネズミみたいにぐるぐると回り続けている。人が説得されているのを見ると、その人が回りはじめるのがわかる」と感じたという。リハビリテーション期間が終了した後も救出活動を手伝いつづける人がいる一方で、離れる人もいる。判断は本人の自由にまかせられる。

リハビリテーションが必要なのは、脱会してもすぐには社会復帰できないからである。社会復帰を妨げる要因として、脱会後の苦悩がある。元信者が直面するポスト・カルト問題を最初に指摘したのは、心理学者マーガレット・シンガーである[Singer,1979]。シンガーによれば、（1）抑圧、（2）孤独、（3）決定不可能、（4）心理的鋭敏さのかすみ、（5）無批判的な受動性、（6）カルトの恐怖、（7）ガラス張り効果（家族から監視されていると感じることのつらさ）、（8）説明の苦悩、（9）罪、（10）利他主義についての困惑、以上の十点の問題があるという。実際、脱会者の多くは一般社会になじむまでにかなりの時間を要するようである。

救出カウンセリングは、脱会者に大きな負担を強いるディプログラミングの欠点を克服して、脱会者を心理的にサポートする態勢をそなえたはずだった。それにもかかわらず、ポスト・カルト問題はいっこうに軽減されていないのである。

4　救出カウンセリングのコミュニケーション・パターン

ふつうポスト・カルト問題は心理的病理の徴候と見られる。だが、この見方は脱会者が置かれるコミュニケーション環境をまったく考慮していない。ポスト・カルトの苦境を理解するためには、脱会者が置かれている状況に目を向ける必要がある。R・D・レインによる病理的コミュニケーションについての議論は、この視点から考察するための手がかりになる。[11]

レインの議論は、徹底して自他関係の二重性にこだわっている。人はアイデンティティについての確かな感覚を得るために、他者の存在を必要とする。レインはいう。「女性は、子供がなくては母親になれない。彼女は、自分に母親のアイデンティティを与えるためには、子供を必要とする。男性は、自分が夫になるためには、妻を必

要とする。愛人のいない恋人は、自称恋人にすぎない」[Laing, 1961=1975: 94]。他者を鏡として私は私であることを確かめる。「ひとは、あのなつかしい友の、あのなつかしい認知の笑顔によって、自分自身を認知するのである」[Laing,1961=1975: 101]。だから、他者がいないと、根源的な意味において私は私であることができない。アイデンティティの確かな感覚をもつための条件は、自己が他者の世界のなかで存在を認められたと感じられることである。他者の世界のなかに居場所を見いだすことができたとき、私は自己の存在の確かさを実感するのである。

けれども、他者はいつも私の期待にこたえてくれるとはかぎらない。私の望むアイデンティティを他者が認めてくれなかったり、私の嫌うアイデンティティを他者が私に帰属させたりすることは、実際に誰もがよく経験するところである。自己が他者から見られる客体であることは、潜在的に自己が危険にさらされているということでもある。他者は自己のアイデンティティを確証してくれる存在であるが、同時に自己を脅かす危険な存在にもなりうる。

自己にとって他者存在のもつこの二重の役割は避けられない。自己のアイデンティティの確かな感覚をもつことが、ひとりの独立した存在として他者と関係するための条件でありながら、自己のアイデンティティの確かさは他者からの確認によっている。もし私が、他者とのいっさいの関係から身を引いて自分だけの空想のなかに閉じこもるならば、アイデンティティの確かさは維持できないのである。

他者から確認されないようなアイデンティティは、まったく不安定なものである。そのとき私は私のなかの世界に安住することもできないし、他者の世界のなかに身を置く場所を見つけることもできなくなる。このような、どこにも身を置くことができない宙ぶらりんの状態を指して、レインは「安住しえない境地」といった。「安住しえない境地においては、たとえ、彼がどのように感じ、どのように行動しようとも、また状況がどんな意味を持っていようとも、彼の感情は正当性をはぎとられ、彼の行為はその動機、意図、結果をむしり去られ、状況はその意味を奪われる」[Laing, 1961=1975: 171]。このとき、人は「存在論的不安定」の状態に陥る。

「存在論的不安定」にある人は、自己を生きたものとしてではなく死んだものとして、実在的なものとしてではなく非実在的なものとして、世界の残余からあやふやにしか区別されないものとして感じる。存在論的に安定していることは、自己が自己であると感じられるための要件である。レインはつぎのように指摘している。「自己の存在がこの一次的経験的意味で安定している人間では、他者とのかかわりは潜在的には充足したものであるが、存在論的に不安定な人間は、自己を充足させるよりも保持することに精いっぱいなのである。日常的な生活環境さえが、彼の低い閾値を脅かすのである」[Laing, 1960=1971: 52]。

「安住しえない境地」は、あるタイプのコミュニケーション・パターンによって特徴づけられる社会関係において発生しやすい。たとえば、家族である。家族のように緊密に結びついた集団では、メ

ンバーの誰かが「存在論的不安定」の「安住しえない境地」に置かれる可能性が高くなる。自己の統合が家族の統合に依存しているとき、私は家族のなかの他のメンバーにも同じように家族にコミットすることを求めるだろう。他のメンバーが家族にコミットしていると感じられるとき、私は安心することができる。もし家族が破壊されるならば、それは私が破壊されることと同じである。危機に陥った家族の内部では、トランスパーソナルな防衛機能が働くとレインはいう。トランスパーソナルな防衛とは、「自己の内的世界を守るために、他者の内面世界を統御しようと企てる防衛」[Laing, 1969=1979: 23]であり、家族の統合を維持するための戦略として機能する。精神分析における防衛はふつう自己による自己の内面への働きかけのことであるが、家族のなかでは自己を守るための防衛機能が他者の内面にまでおよぶ。

家族の統合は、メンバーそれぞれが同じように「われわれ」家族の像を内面化し、家族に同一化することにかかっている。ひとりでも家族に背を向ける者がいれば、家族の統合は破壊されることになる。家族は統合を守るために家族を破壊する者の内面に働きかける。家族の防衛機能は、人を「安住しえない境地」に追いやるコミュニケーションの形態をとる。

救出カウンセリングは、このような家族の防衛機能として、人を「安住しえない境地」に置くコミュニケーションによって特徴づけられる。救出カウンセリングのコミュニケーション・パターンは、「無効化」と「属性付与」、そして「自発的であれ！」という命令が組み合わされたものである。これらすべてが、レインのいう「混乱させたりけむにまいたりする対人行動」[Laing, 1961=1975: 173]にあたる。[12]

「無効化」とは、ある人の意志を無効なものと見なすことによって実際にその効力を奪うことである。「無効化」は「属性付与」とセットでもちいられる。人にある属性を付与することは、その人間を特定の境地に置く行為であり、暗黙のうちにしたがわれるべき命令としての力をもつ。レインの引いたつぎの例がわかりやすい。

母・・（十四歳の娘に）おまえは悪い子だよ。
娘・・いいえ、私はそんなじゃないわ。
母・・いいえ、おまえはそうなんだよ。
娘・・ジャックおじさんはそう思ってらっしゃらないわ。
母・・彼は、私が愛しているようにはおまえを愛していないよ。母親だけが娘の真実をほんとうに知っているんだし、また私のようにお前を愛している者だけが、そのことがなんであろうと、おまえ自身の真実を話してやれるのだよ。もしおまえが私を信じないのなら、おまえ自身よく鏡を見たらどうなの。そうしたら私が真実を言っているのがわかるわよ。[Laing, 1969=1979: 185]

母親の言葉によって、娘自身の主張を無効にする感情が娘のものにされる。そして、母親だけが娘の真実を知っているといわれる。

ここで、「悪い子」という否定的な評価が与えられることが問題というのではない。レインがいうように、「悪い子」を「かわいい」に変えても構造は同じである。どれだけ母親が娘に対して優しく愛情をもって接しても、同じコミュニケーション・パターンであれば、娘は混乱する。要は、「お前は、自分がそのように感じていると考えるかもしれないが、お前はほんとうはそのように感じているのではないということを私は知っている」[Laing, 1961=1975: 193]と伝えるようなコミュニケーションの問題である。

マインド・コントロールされた統一教会信者は自分で自分の意志がわからない状態になっている、と想定する救出カウンセリングは、まさにこのような「無効化」と「属性付与」のコミュニケーションに一致する。レインによれば、「この種の属性付与に遭遇した人間は、脚下に堅固な土台がない限り、自分の意図や感情がどんなものであるかを知るのに困難をおぼえるだろう。さもなければ、彼は自分があれこれのことをいつ感じるのか、また自分のすることをどう定義づければよいのかが、もはやわからなくなる」[*ibid*: 193]。

マインド・コントロールとは、「本人には自分の意志で納得ずくでやっていると思わせながら、その人の心を操ること」[マインド・コントロール研究所編、1997: 103]と定義される。この見方にしたがうと、本人が自分の意志で信仰しているのだと主張することじたいが、マインド・コントロールの証拠になる。救出カウンセラーのスティーヴン・ハッサンは、「私のアプローチは、マインド・コントロール集団にどんなに深入りしたメンバーでも、心の深い深いところでは脱出したいと願っているのだという信念にかかっている」[Hassan,1988=1993: 222]と主張する。このような信念をもってすれば、信者が「自分はマインド・コントロールされていない」とどれだけ強く主張したとしても、そういい張る信者の口調や態度の激しさにマインド・コントロールの証拠を見てとるだろう。ほんとうは脱会したがっているのに、彼らはそのことに気づいていないだけなのだと救出カウンセラーは考えるからである。

この環境で説得されつづけることによって、多くの信者が脱会を決意する。信仰が保てなくなる理由として、統一教会信者Oさんは、「恨みの思いと感謝できないという気持ちがあり、神さまにつながることができなくなる。そうなってしまうと、もうどうでもよくなってしまう」と説明する。

脱会を決意した場合でも、「安住しえない境地」から逃れるのは難しい。本人の脱会宣言はすぐには信用されないからである。まず偽装脱会が疑われる。たとえ偽装でないと認められても、それが自発的な脱会でないといけない。みずからの主体的な判断で脱会するのでないかぎり、マインド・コントロールが解けたことにはならないからである。

ここには、「自発的であれ！」という命令と同型のコミュニケーション・パターンが見られる。「自発的であれ！」という命令はパラドックスになる。命令を実行しようとすると命令に反することになり、したがうことができない。家族のように拒否することの困難な関係のなかで「自発的であれ！」という命令が出されると、コミュニケ

ーションが病理的になる傾向がある。命令にしたがったとしても、自発的ではないと非難されるし、自分の意志を貫いて命令に逆らえば、逆らったことで非難される。

この命令から逃れる方法は、家族から離脱してしまうことである。しかし、それは簡単ではない。「保護」された信者がどれだけ自分の意志による信仰を主張しても、マインド・コントロール理論によってその主張は無効にされてしまう。おまえは統一教会に入って悪いことをするような子どもではなかったはずだ、と「属性付与」される。さらに、本人が説得に応じて脱会を決意したとしても、こんどはその脱会の意志が偽装脱会ではないかと疑われ、無効にされる。脱会宣言が認められた後も、家族は子どもがまだマインド・コントロールから完全には解放されていないのではないかと心配する。脱会者がすぐには元の生活に戻らないことが、家族の心配をいっそう増大させる。N牧師によれば、「統一教会での生活が長ければ長いほど社会復帰も難しくなり、社会に再適応するようになるまでに時間がかかる。なかなか社会復帰しない子どもを見て、親は子どもが再び統一教会に戻るのではないかと不安になる」という。このように家族から心配されることが、じつは脱会者を「安住しえない境地」に縛りつけているのである。脱会者は自発的になるように命じられるが、自発的にふるまうと、まだマインド・コントロールが解けていないと思われる。こうして脱会者の「安住しえない境地」はいつまでもつづく。

この状況から逃れるのが困難である理由は、家族という関係の性質によることをレインは示唆している。子どもにとって母親や家族が危険を発生する当の対象物である状況において、「彼らは、母親や家族が自分たちを窒息させようとしていると感じる。彼らは恐ろしくなり逃げ出したく思う。だが、彼らが怖がれば怖がるほど、家族は一層怖がりかつ怖がらすようになる。彼らは、自分たちを怖がらせるものに救いを求めてしがみつく。熱い鉄板に手を触れて、その手を引っこめないで逆にもっと強く鉄板に押しつけるひとのようなものである」[Laing,1961=1975: 184]。

大切なのは、しがみつかれる家族の側も「安住しえない境地」に置かれていることである。乳房を求めて泣く赤ん坊は、乳房が差し出されても引っこめられても泣く。母親は、ふくませることも切り上げることもできないダブル・バインド状況に置かれる。その結果、母親（家族）と子どもは知らず知らずのうちに連携して「相互共謀的窮地」[大村、1989]を生み出してしまうのである。

救出カウンセリングは、強制的・暴力的な方法の問題点を克服した点で洗練された方法といえる。だが、方法が洗練されたことによって、図らずも脱会者本人を（そして、ときには家族全員を）「安住しえない境地」に置くコミュニケーション・パターンを取り込むことになった。

「安住しえない境地」に置かれた脱会者たちは、自分のいまいる状況を定義することが難しくなる。自己が自己であるという確かな感覚が得られず、日常的なコミュニケーションさえ困難になる。元信者のEさんは、「人の話が聞けなくなった。いまでも、人の話を聞

いていて、ボーッとしていることがある。話が頭に入らないで、抜けていく。集中力がなくなった」と話している。家族との関係がうまくいかないケースも多い。これらはマインド・コントロールの後遺症というような心理的病理の徴候ではなく、救出カウンセリングのコミュニケーション・パターンそのものの問題である。

5　ポスト・カルトからの回復

自発的な脱会を目的とする救出カウンセリングは、初期におこなわれてきた強制的・暴力的な方法への反省から生み出されたのだった。カルト信者本人の意志を尊重することは、正当に評価されるべきである。しかしながら、家族の愛を強調する救出カウンセリングのコミュニケーション・パターンは、脱会者を「安住しえない境地」に縛りつける。

そして、家族もまた「安住しえない境地」に置かれる。救出活動では、子どもを救出しないのは親としての愛情の欠如であるといわれる。親としての愛を示すためにも子どもを救出しなければならない。親の愛情は、正しい方法で救出することによって証明される。しかしながら、その正しい方法には、子どもを混乱させる要素が含まれている。親が愛情をもって接しようとすればするほど、ますます子どもの混乱はひどくなる。混乱した子どもに対して、家族は愛情をそそぐことのほかに手だてをもたない。愛情をそそいでも子どもはこたえてくれず、混乱するばかりである。家族は疲れ果て、どうしてよいかわからなくなる。

混乱した状態にある脱会者たちが、ポスト・カルト問題から回復するためには、「存在論的安定」を取り戻す必要がある。家族がその手助けをするのは難しい。なぜなら、家族とのコミュニケーションこそが、脱会者たちを混乱させているからである。救出カウンセラーは、家族が一体になることばかり強調する。だが、ポスト・カルトの苦悩は、家族が強い絆で結ばれていることじたいが問題になるケースといえる。レインは、「そもそも人間的なかかわりが成立しうるのは、分離はしているものの孤立はしていない存在者のあいだにだけである。われわれは孤立者ではないし、かといって同一の身体に属する諸部分でもない」[Laing,1960=1971: 28]という。一つの有機体であるかのように感じられる家族のなかで、人は「安住しえない境地」に縛りつけられる。他者との人間的なかかわりは、他者との分離が確立されたうえで実現される。「保護」という特殊な環境で過度に密接に結ばれた家族関係は、ポスト・カルトからの回復を阻害しかねない。

脱会者の多くは、助けてくれたことで家族に感謝すると同時に、自分の体験については家族に理解されないとも感じている。元信者Mさんが、「統一教会の人間関係の魅力は、たぶん家族は理解できないだろう」というように、多くの脱会者が統一教会のよい面も積極的に認めている。これは家族には理解されないことである。また、元信者のDさんは、「統一教会のことは、体験していない人には通じない話、わからない話がある。家族にもわかってもらえない部分で

す。家族は、聞いてくれようとするし、わかってくれようとするのだけど、それでもわかりっこない部分があります。それがわかるのは元信者の人たち」という。このように主張することで、脱会者たちは家族との距離をとろうとする。いったんは戻った家族のなかに安住できないのだとしたら、もういちど離れてみるしかないだろう。

他の脱会者との交わりは、家族のなかにいるよりも安心できる。他の脱会者とのかかわりのなかで脱会者たちが求めるのは、「無効化」や「属性付与」されないコミュニケーションである。人間は他者の世界のなかに自分の場所を求めるが、そこで安住できるためには、他者との分離が確立されていなければならない。カルトからの救出という激しい感情的な体験をした後の家族は、以前よりも密接な絆で結ばれるようになったが、その絆の強さが脱会者にとってはかえって居心地の悪さにもなるのである。

注

(1) 宗教研究者の多くは、価値判断的な含みを嫌って、カルトよりも新宗教という言い方を好む。確かに分析概念としてのカルトにはあいまいさや価値判断の問題がある。しかし、救出活動に焦点を合わせた研究の場合、カルトという言葉は、一般の人びとがいだく否定的な感情をうまく表現する点で利用価値がある[Beckford, 1985]。

(2) 社会心理学の知見によって入信を説明するマインド・コントロール理論に対して、櫻井義秀は、「複雑な社会過程を極度に抽象化したモデル及びその実験結果から得た結果を、もう一度社会的事実へと還元して事実を解釈する方法それ自体に問題がある」[櫻井、1996: 88]と批判する。アメリカではカルトに関連する裁判の多くで、マインド・コントロール理論の妥当性を否定する判決が下されている[藤田、1995]。

(3) 世界基督教統一神霊協会の略称には、「統一教会」と「統一協会」の二種類が使われている。教団は略称として「統一教会」を採用しているが、統一教会に批判的な論者の多くは、宗教的な教会の名に値しないという意味で「統一協会」をもちいる。本稿では、教団が主張する「統一教会」の略称を使う。

(4) 一九七五年にフランス・カトリック司教協議会と米国教会評議会信仰職制委員会、一九八五年に日本カトリック司教団、一九八六年にヴァチカン教皇庁と日本基督教団がそれぞれ統一教会をキリスト教とは認めない旨の公式声明を発表している。統一教会の教義に対するキリスト教からの批判は、イエス理解に限定されず、汎神論的、シャーマニズム的な聖書解釈を説く『原理講論』(統一教会の教理解説書)のほとんどすべての箇所について、聖書学者・神学者らは異端的要素を指摘する[浅見、1987][江原、1988]。

(5) 最近になって、CANは度重なるサイエントロジーとの訴訟の末に破産したため、資産が競売にかけられ、組織名やロゴがサイエントロジーのメンバーに落札された。

(6) テッド・パトリックは、一九七四年にコロラド州で不法監禁により有罪判決を受けたのをはじめとして、何度も有罪となっている[Biermans,1988=1988]。

(7) アメリカでは、心理カウンセラーによる救出カウンセリングの費用は、一日あたり二五〇～一〇〇〇ドルくらいが相場といわれている。日本では、牧師は原則として救出に対する謝礼は受け取らないという。だが、気持ち程度の謝礼なら受け取るという人もい

るし、謝礼は受け取らないが車代は受け取るという人もいて、微妙なところである。

(8) 家族による救出は、夫が妻を救出するケースや妻が夫を救出するケース、子どもが親を救出するケースもあるが、いちばん多いのは親が子どもを救出するケースである。ここでは、救出を主に親が子どもを救出するケースとしてあつかっている。調査は一九九八年三月から九月にかけて実施した。脱会後に救出活動を手伝っている元信者四名へのインタビュー調査(それぞれ二回から五回)、脱会後とくに救出活動にはかかわっていない元信者一名(一回)、救出カウンセリングを受けたが脱会しなかった統一教会信者二名(それぞれ二回)へのインタビュー調査を実施した。また、家族が勉強する場に出席し、牧師、家族への聴取りも随時おこなった。本文に引用した信者、元信者、牧師、家族の発言は、すべてこの調査による。

(9) 多数出版されている救出カウンセリングのガイドブックの内容は、統一教会の反社会性、マインド・コントロールによる勧誘、元信者や家族の手記といったところが一般的である。なかには脱会届の文例まで載せている本もある[田口、1992]。

(10) Oさんは、「保護」されたが、脱会を偽装してマンションから出してもらった後にふたたび統一教会に戻った。その後、親に電話だけはしているが、自分の居場所は知らせていないという。

(11) レインは精神病者と診断された人びとが、一般に思われているよりも理解可能であることを示そうとした。狂気とされる人びとのコミュニケーションは、正気とされる人びとの世界から理解可能であり、二つの世界はそれほど隔たっていない。したがって、奥村隆が指摘するように、狂気とされる人びとの状況と戦略を描写するレインの議論は、正気とされる人びとの状況と戦術を映し出すのに有効であると考えられる[奥村、1998: 63]。

(12) レインは、このような自己を妨害し破壊する「混乱(confusion)」と、人間存在を錬磨する可能性がある「葛藤(conflict)」とをはっきり区別している。レインのいう意味での「葛藤」は「存在論的安定」において生じるが、「混乱」は「存在論的不安定」から生じる。「葛藤」と「混乱」の違いは、シェイクスピアの作品の登場人物の苦悩と、カフカやベケットが描く人物の苦悩の対照として説明される。シェイクスピアの人物は、どれだけ疑惑や葛藤に苦しんでも、自己の存在をリアルで生きたものとして経験している。一方、カフカやベケットが描くのは、生きているということを実感できないでいる生である[Laing,1960=1971: 48-50]。

参考文献

浅見定雄、一九八七、『統一協会=原理運動—その見極め方と対策—』、日本基督教団出版局。

———、一九九七、『なぜカルト宗教は生まれるのか』、日本基督教団出版局。

Beckford, James A., 1985, *Cult Controversies : The Societal Response to the New Religious Movements*, Tavistock Publications.

Biermans, John T., 1988, *The Odyssey of New Religions Today : A Case Study of the Unification Church*, Edwin Mellen Press.(「現代の宗教迫害史」翻訳委員会訳、一九八八、『現代の宗教迫害史—統一教会の受難と真実』、光言社)

Bromley, David and Anson Shupe, 1981, *Strange Gods*, Beacon Press.(稲沢五郎訳、一九八六、『アメリカ「新宗教」事情』、ジャプラン出版)

江原鋌治、一九八八、『カトリックと統一教会』、サンパウロ。

藤田尚則、一九九五、「アメリカ合衆国における『新宗教運動』と『信教の自由』」、『宗教法』、第一四号。
Hassan, Steven, 1988, *Combatting Cult and Mind Control*, Park Street Press.（浅見定雄訳、一九九二、『マインド・コントロールの恐怖』、恒友出版）
井出定治、一九七五、『異端とは何か』、いのちのことば社。
川嶋英雄、一九九六、『拉致監禁・百二十日間』、M.C.P.
Laing, R.D., 1960, *The Divided Self : An Existential Study in Sanity and Madness*, Tavistock Publications.（阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳、一九七一、『引き裂かれた自己―分裂病と分裂病質の実存的研究』、みすず書房）
――――1961, *Self and Others*, Tavistock Publications.（志貴春彦・笠原嘉訳、一九七五、『自己と他者』、みすず書房）
――――1967, *The Politics of Experience*, Pantheon Books.（笠原嘉・塚本嘉壽訳、一九七二、『経験の政治学』、みすず書房）
――――1969, *The Politics of Family and Other Essays*, Tavistock Publications.（阪本良男・笠原嘉訳、一九七九、『家族の政治学』、みすず書房）
Laing, R.D. and A.Esterson,1964, *Sanity,Madness and The Family : Family of Schizophrenics*, Tavistock Publications.（笠原嘉・辻和子訳、一九七二、『狂気と家族』、みすず書房）
Langone, M.D. ed, 1993, *Recovery from Cults : Help for Victims of Psychological and Spiritual Abuse*, W.W. Norton.
マインド・コントロール研究所編、一九九七、『親は何を知るべきか』、いのちのことば社。
増田善彦、一九九六、『「マインド・コントロール理論」その虚構の正体』、光言社。
西田公昭、一九九五、『マインド・コントロールとは何か』、紀伊國屋書店。
――――、一九九八、「脱会が元メンバーにもたらすもの」、『現代のエスプリ』、No.369。
奥村隆、一九九八、『他者といる技法―コミュニケーションの社会学』、日本評論社。
大村英昭、一九八九、『新版 非行の社会学』、世界思想社。
櫻井義秀、一九九六、「オウム真理教現象の記述をめぐる一考察―マインド・コントロール言説の批判的検討―」、『現代社会学研究』、第九巻。
世界基督教統一神霊協会伝道教育局翻訳編集、一九九四、『原理講論』、光言社。
Shupe, Anson and David G.Bromley, 1979, "The Moonies and the anti-cultist:movement and countermovement in conflict", *Sociological Analysis*, 40 (3).
――――1985, "Social Response to Cults",in Hammond Phillip E. ed, *The Sacred in a Secular Age*, University of California Press.
――――1994, *Anti-Cult Movement in Cross-Cultural Perspective*, Garland Publishing.
Singer, Margaret Thaler,1979, "Coming out of the Cults", *Psychology Today*, Vol.12,No.8.
Stark, Rodney and William Sims Bainbridge, 1985, *Future of Religion*, University of California Press.
田口民也、一九九二、『統一協会からの救出』、いのちのことば社。

Rescue from Cult : Untenable Positions of Ex-Moonies

Futoshi WATANABE

Religious cult has been in a high state tension with their surrounding societal environment. Families of cult members opposed cult organizations with a vengeance. Some psychologists and psychiatrists accuse cult of recruiting young people in terms of either brainwashing or mind control. Families of cult members assume that their children need to be rescued from cult. Deprogramming and exit counseling are employed to rescue cultist from cult.

Ex-cultists who have been rescued by family often suffer from various psychological pains and troubles regarding communication after their disengagement from cult. Anguished states of ex-cultists are derived from the loss of primary ontological security of his/her own self. In this paper, we try to explain the relation of post-cult problems and the sort of communication patterns of exit counseling, instantiating the case study of rescue activities against Unification Church.

The sort of communication patterns reiterated through the whole process of exit counseling may confuse others and put them in untenable positions that R.D.Laing suggested. As a result of being exposed to such a communication pattern, ex-cultists could not have a firm sense of his/her own autonomous identity.

The method to rescue individuals from cult has shifted in its orientation from coercive way in the initial stage to current moderate way that emphasizes the love of family. But the close-knit of family tends to carry on the sort of communication that put others in untenable positions. That makes post-cult problems knotted.

Key words

exit counseling
post-cult problem
Unification Church
untenable position
R.D.Laing